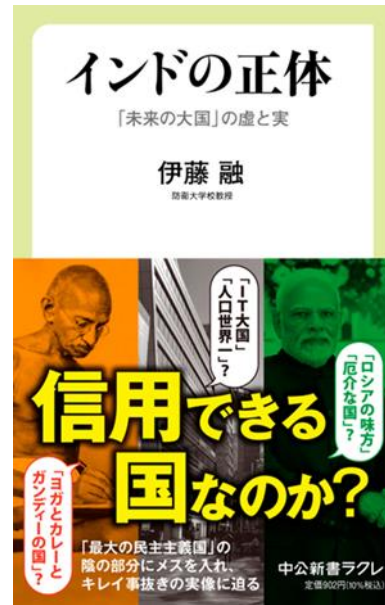


財務総合政策研究所インドワークショップ

インドの外交政策と行動原理



伊藤 融(防衛大学校)

1. インド外交の展開

冷戦期 「非同盟」政策と「非同盟運動」

1971年 印ソ平和友好協力条約 → 「印ソ同盟」？

冷戦後 全方位型での「戦略的パートナーシップ」外交

2010年代以降 クアッドなど西側との関係緊密化

理想主義から現実主義への転換か？

2. インド外交に通底する論理

基本的思考様式

- ① 大国志向
- ② 自主独立外交
- ③ アルタ(実利)的現実主義

政策規定構造(国際関係のアクターとしてのインドの特性)

- ① 「国民国家」としての脆弱性 → 近隣外交を強く制約
- ② 連邦政府の政治的脆弱性
- ③ 域内と域外でのパワー格差 → 域内での現状維持
域外での修正主義

3.対大国外交

(1)緊密化する対米関係

① 冷戦期の疎遠な関係からの転換

1990年 米国が対パキスタン軍事援助を停止

1990年代後半 インドの戦略的価値の評価 ←中国の台頭

1998年 インド核実験

→関係緊密化の障害の除去、印米戦略対話の開始

2000年 クリントン大統領訪印

米国による印パの「切り離し」「ディハーフネーション」

2004年 「戦略的パートナーシップのつぎのステップ(NSSP)」

2007年 印米原子力協力協定

2010年 オバマ大統領訪印、インドの常任理事国入り「支持」

2015年 オバマ大統領訪印、インド共和国記念日主賓
第1回日米印外相会合

～「インド太平洋」における3カ国の協力推進

2016年 印米兵站交換協定(LEMOA)

～軍事基地の相互利用へ道筋

2017年 トランプ政権「国家安全保障戦略(NSS)」

～インドは「指導的グローバル・パワー、
より強力な戦略・防衛パートナー」

2018年 米、対パ援助を再び停止

印米外務・防衛閣僚級協議(2プラス2)の開始

通信互換性保護協定(COMCASA)締結

→印米両軍の相互運用性向上

2019年「ハウディ・モディ」集会(ヒューストン)

2020年「ナマステ・トランプ」集会(アーメダバード)

地理空間協力のための基礎的な交換・協力協定(BECA)

2021年3月日米豪印(クアッド)オンライン首脳会合

9月 クアッド首脳会合@ホワイトハウス

12月民主主義サミット

2022年5月 クアッド首脳会合@東京

2023年6月 モディ、国賓待遇で訪米

GEがインドで戦闘機エンジン製造など

11月 2プラス2で「イスラエル支持」

装甲車製造の検討

②印米接近の要因と限界

なぜ接近するか？

- ・ 民主主義国同士の「自然な同盟」
～「民主主義同盟/連合」(ポンペオ前国務長官)、
バイデン政権の「民主主義サミット」
- ・ インド市場の潜在力 (米「基幹産業」としての兵器、原子力を含む)
- ・ インドにとって最大の輸出相手国、主要投資国
- ・ 中国に対する「共有された」懸念

印米間の埋めがたい溝

- ・ インドの戦略的自律性、米国の単独行動主義／他国への介入
イラク戦争、イラン核問題、リビア情勢、ロシアのウクライナ侵攻etc
- ・ 新興国としてのインドと先進国の米国
気候変動問題、W T Oドーハラウンド交渉etc

モディ政権下(とくに2019年第2期以降)での新たな溝
→深まる恐れ?

- ・ 価値をめぐる問題への対応

欧米の批判とインドの反発

ブリンケン米 국무長官(2022年4月印米2プラス2)

「政府、警察、刑務所の職員による人権侵害の増加を含め、
インドで起きている最近の出来事を、われわれは監視している」

→ ジャイシャンカル外相

「われわれも、米国を含め、他国の人権状況について独自の
見解をもっている」

米世論はモディ首相へ厳しい見方
ムスリム・野党・市民団体抑圧、
メディア規制など強権的手法

2023年の出来事

BBC「モディ問題」への規制

ラフル・ガンディー議員資格剥奪

カナダ・シク教徒暗殺疑惑

→駐カナダ大使

「ルールに基づく国際秩序に反する」

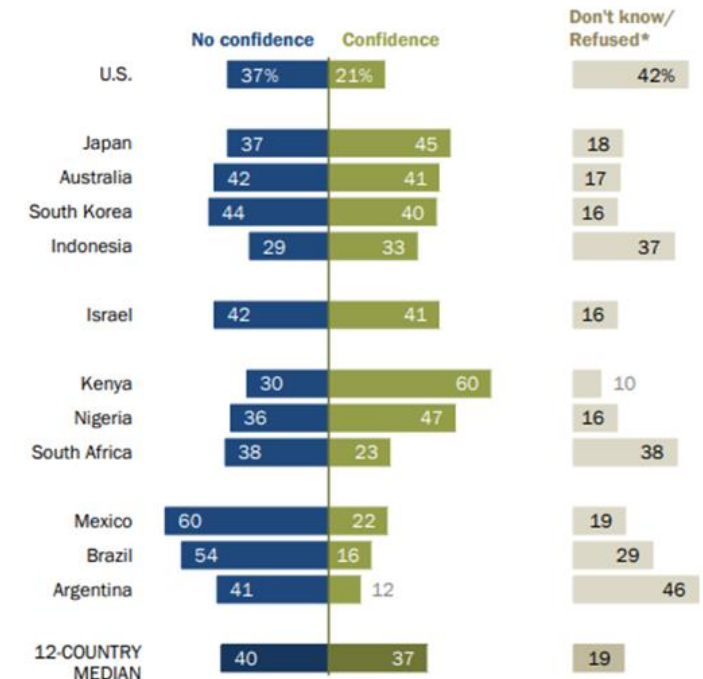
カナダ大使館員削減要求

→国務省報道官

「ウィーン条約に反する」

Views of Modi across countries are mixed, with substantial minorities not offering an opinion

% who have ___ in Indian Prime Minister Narendra Modi to do the right thing regarding world affairs



*In Australia and the U.S., the question included a "never heard of this person" response option. "Don't know/Refused" includes respondents who said they had "never heard of this person".

Source: Spring 2023 Global Attitudes Survey, Q15g.
"Views of India Lean Positive Across 23 Countries"

PEW RESEARCH CENTER

(2) 「関与」と「警戒」の対中関係

①1962年以降の敵対関係からの変化

1949年 中華人民共和国成立→インドはいち早く承認

1954年 印中平和五原則→1955年 バンドン会議

1958年 中国によるアクサイチン道路建設

1959年 チベット反乱、ダライ・ラマのインド亡命

1962年 印中国境戦争→インド敗北

→敵対関係へ

1988年 ラジーヴ・ガンディー首相訪中

→国境問題についての合同作業グループ設置、
首脳外交活性化

1998年 インド核実験に伴う一時的な冷却化

2005年 「平和と繁栄のための戦略的・協力的パートナーシップ」

2008年 中国がインドにとっての最大の貿易相手国に
(印側の大幅な入超)

2014年 習近平訪印

モディ、インフラ部門への中国からの投資歓迎

5年で200億ドルの投資目標、国境問題では厳しい姿勢

印、AIIB参加

2015年 モディ訪中

「メイク・イン・インド」呼びかけ

②モディ政権後半期(2016年半ば～)の「警戒」論への傾斜

a)経済的関与への幻滅

変わらぬ貿易不均衡、インドの産業駆逐の危機

→RCEP離脱の一因

b)政治的対立

印のNSG加盟(2016年以降)を中国が阻止

パキスタンの過激派指導者国連制裁指定を中国が阻止

c)インドの「域内」に入り込む「一帯一路」への懸念

→ 2017年5月 「一帯一路フォーラムサミット」ボイコット

←主権(CPEC)、債務(スリランカ)、中国の覇権構築

d) 強まる中国の軍事的攻勢

2017年 ドクラム危機

2020年 ガルワン衝突、実効支配線での対峙→現在まで続く

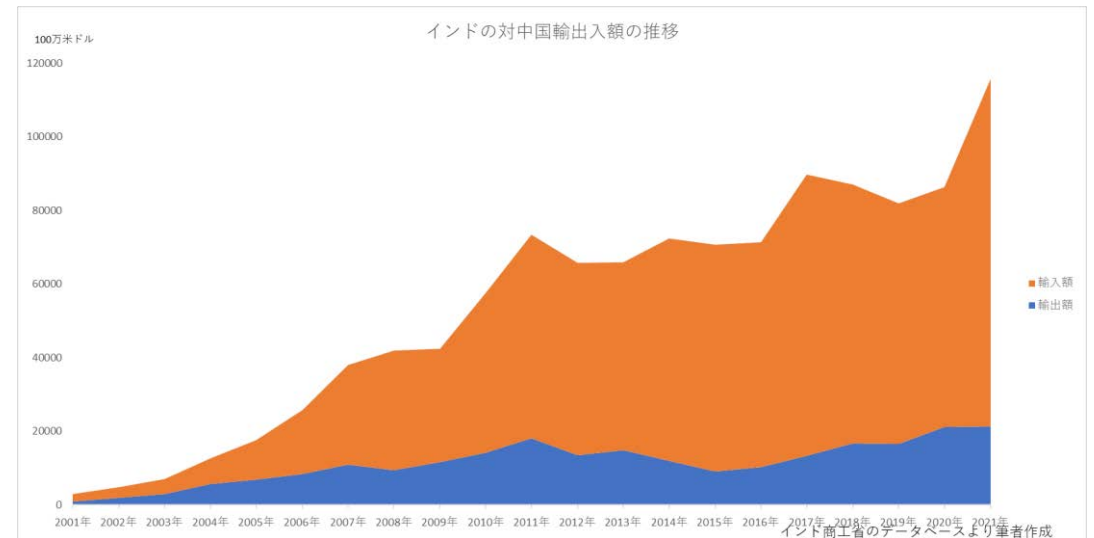
反中感情の高揚

→中国製アプリ、中国製品、投資等ボイコット

しかし…

2021年 コロナ禍で、対中貿易(輸入)は過去最高額を更新

「自立したインド」？



それでも必要な中国への関与

- ・ 隣接する台頭する市場の重要性
- ・ 経済的な多国間レジーム形成

国連気候変動枠組条約締約国会議

WTOドーハラウンド自由化交渉

公正な経済秩序の構築やドル中心の国際通貨秩序見直し

- ・ 多極世界の実現、国家主権尊重

→しかし、習近平体制下での軍事的攻勢で協力は困難に

←世論の対中感情の悪化

(3) 「時の試練を経た」対口関係

①冷戦期の伝統的な関係の維持

1971年 印ソ平和友好協力条約

1993年 印口友好協力条約

2000年 プーチン大統領訪印、「戦略的パートナーシップ」宣言

(2) 印口の緊密な関係の要因

- 兵器分野でのインドの対口依存／最大の顧客としてのインド
ミグ戦闘機をはじめとした旧ソ連に由来する兵器体系
共同の研究開発、生産
S-400ミサイル防衛システム購入 → 米国による制裁圧力
- 原子力協力
古くからのパートナー
インド側の濃縮・再処理の権利、燃料の安定供給をふくむ協定
- インドの政治大国化を強く支持するロシア
国連安保理常任理事国入り
- 単独行動主義や一極支配への反対、国家主権尊重
- 隣接する中国への懸念
- パキスタン政策でのインドの立場支持

印口の対立要因→見あたらず　しかし. . .

印口関係緊密化の限界

インドにとってのロシアの重要性の相対的低下

←選択肢の増えたインド

薄い貿易・投資関係

→印外交における「保険」「梃子」としての位置づけ

2022年　ロシアのウクライナ侵攻

国連安保理・総会でのロシア非難決議を「棄権」

クアッドでも名指し非難は避ける

しかし不快感は表明　※ソ連のアフガン侵攻時との違い

「今は戦争の時代ではない」(モディ首相)

他方でロシアからの原油・肥料輸入は激増

→「グローバルサウス」論

G20 ニューデリーサミット

「ロシア」への言及・非難抜き
の首脳宣言発出

- ・これまでの閣僚会合では共同声明出せず
- ・サミット直前でも溝は埋まらず



なぜ西側は合意したのか？

- ・インド+新興3カ国(インドネシア、ブラジル、南ア)の最終案
- ・G7議長国日本が仲介？

4. 大国との戦略的パートナーシップの意味

大国間の多角的な外交 — 「全方位型戦略的パートナーシップ」の意義

- ① 緊密化する対米関係
- ② 「関与」と「警戒」の対中関係
- ③ 「時の試練を経た」対ロ関係

3つの関係の「使い分け」

域内現状維持 → 米国、ロシア

域外修正主義 → 中国、ロシア

域外におけるインドの地位向上 → 米国

インドから見た米中ロの関係イメージ

問題領域	アメリカ	中国	ロシア
国内政治的価値(民主主義、多様性)	○	×	△
国際政治秩序(多極世界、主権尊重)	×	○	○
国際経済秩序(WTO、気候変動問題等)	×	○	△
政治大国化(国連安保理常任理事国、NSG入り等)	○	×	◎
地域外交・安保(カシミール、アフガク、中国等)	○	×	◎
軍事協力(兵器輸入・開発、本格的な合同演習)	○	×	○
貿易・投資	◎	○	×
エネルギー・資源	○	×	○

記号注:

◎親和性・協力関係がとくに強い ○基本的に親和性・協力関係が強い

△どちらともいえない ×基本的に疎遠ないし競争・対立関係が強い

← 大国志向実現 + 戦略的自律性確保 + アルタ的リアリズムの発想

地政学的な利益のズレ

インドの海洋の関心

インド洋、「インド太平洋」(の一部)

→クアッドへの関与と期待

大陸の関心

「敵対国」中パ(連携)の脅威

「友邦国」の減少

イラン、アフガニスタン、ミャンマー

→関与困難

→インドにとってのロシアというカードの意味

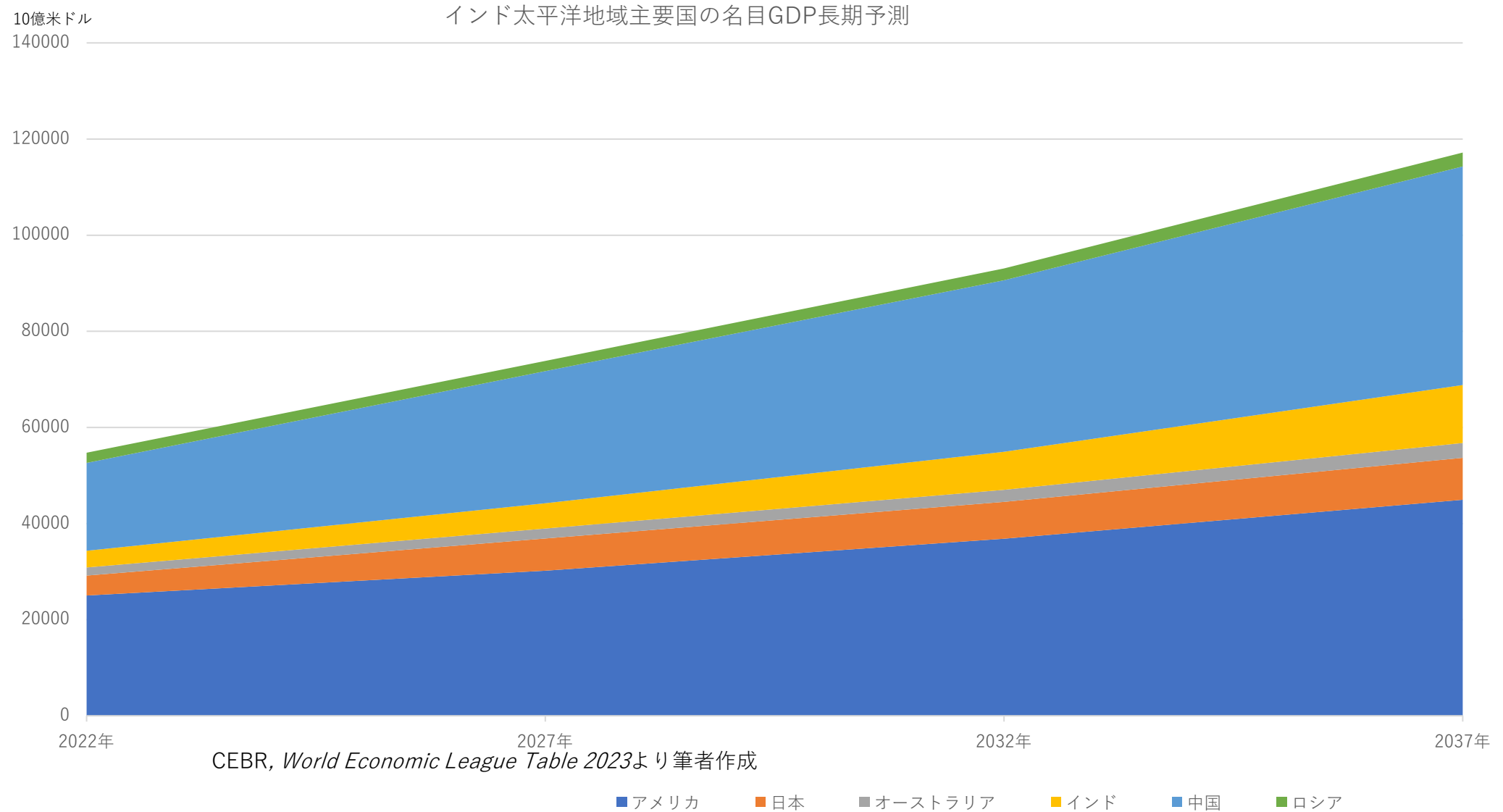
→しかしロシアの中国依存が加速すると…

=インドのジレンマ



インドと周辺図

5.米中対立のなかのインドのゆくえ

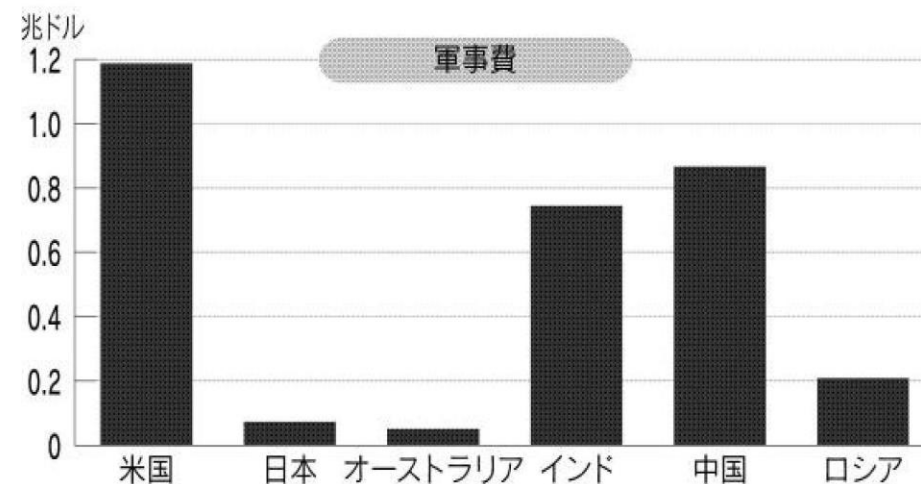
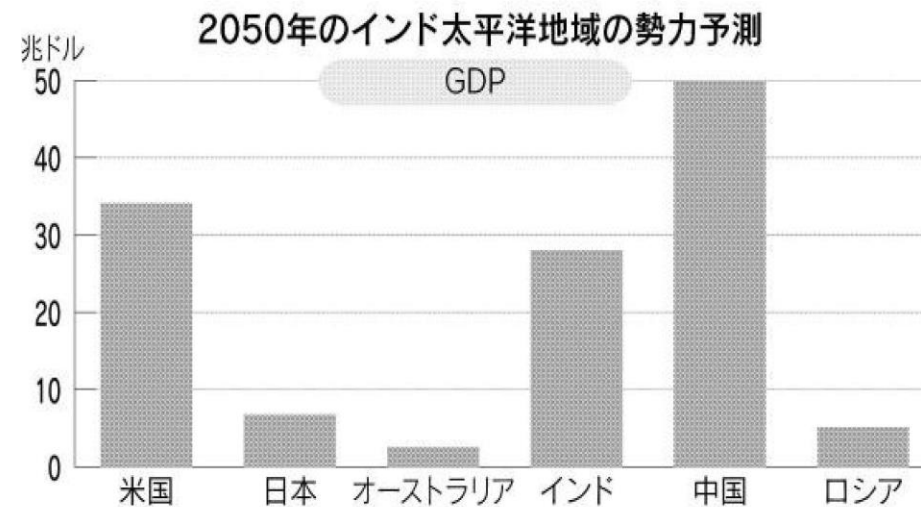


2050年までのインド太平洋地域秩序

米中どちらかが圧倒することはない
日本や豪のパワーは相対的に低下



米中のパワーに接近するインドの動向が
カギ



(出所) PwC[The World in 2050]を基に筆者作成。軍事費はストックホルム国際平和研究所(SIPRI)データベースの2021年のGDP比を基に算出

2023年4月19日『日本経済新聞』朝刊「経済教室」掲載の拙稿

考えられるシナリオ

(1) 日米豪印同盟

現状のクアッド＝「数あるグループの1つに過ぎない」

「インドは同盟は回避する」

中国が本格的に攻勢をかけてきた場合はどうか？

軍事費増でも間に合わない

ロシアの弱体化・中国依存

→クアッドの同盟化を望む議論

インドの躊躇

日米豪の覚悟、「巻き込まれ」のリスク

(2) 印中口同盟

米国の一極支配、単独行動主義、国家主権侵害→RICの絆
BRICS、上海協力機構(SCO)など多層的に連携

「民主主義の後退」に伴う諸問題への西側の批判

→インドが中口などとの連携を強化する可能性

中国の「ジュニア・パートナー」と化すことを受け入れるか？

(3) 戦略的自律性と「多同盟」の維持

異なる相手から異なる利益を引き出す実利外交

インドがどの国からも必要とされる環境



どこまで続けられるか？

米中対立下での中国の攻勢

→ 対中関係を「管理」し、時間を稼ぐインドの戦略
経済成長と軍事力増強が急務